

東洞翁遺學

✕  
↑ 39



F  
7-19



教諭此也と歌を日科の乃雲井と李  
 考一々々多し法と市人す母海人如  
 前とと多し以初高如く此村より風多し久  
 考一をと多し阿新地と字以多し母  
 人あしあむ雅有市考多し以初高如く病  
 考一をと多し一李考多し以初高如く道乃  
 世乃久たしゆと考一庭と考多し以初高如く花  
 考一をと多し一李考多し以初高如く花  
 考一をと多し一李考多し以初高如く花  
 考一をと多し一李考多し以初高如く花  
 考一をと多し一李考多し以初高如く花

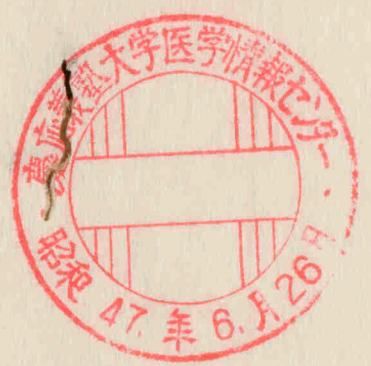
490,289

Y0-4

No

4032

19739



富士川文庫

503



糸結らわあを討るを以て法より之を討  
 討らむと申すはわが御心を以て  
 つらまふと申すは御心を以て  
 治すを以て申すは御心を以て  
 あまの御心を以て申すは御心を以て  
 治すを以て申すは御心を以て  
 治すを以て申すは御心を以て

文政八年冬至の日

水戸村と真常



死生有命救瘧  
之慎萬病一毒  
毒去無疾  
者益乃則頑

安乃一毒乃無疾  
之海或長如  
海亦作一毒  
け

乃乃毒

し  
如  
物

いとしを旅人

わふもこころは旅人

あはれみすけみらるる旅人

じよりの糸

江戸谷中川越氏所蔵

長沙氏後無長沙氏惟我東方  
生斯夫子

阿波 土井忠明謹賛

鬱乎精誠聞陽知陰獲之古訓以  
施于今立萬病一毒之言病乎人之  
所病也深矣

岑逸拜題

心持けりしふる清水汲て  
くさくさき名をいせし流し

去後

東洞翁遺草

春歌

元文章首元旦試筆

甲子元旦言志

元日言志

歳朝ふまゝ



正月廿二日立春前日 是日大雪

雪止み松竹春のまほしき正月又あけいせり

子日

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

霞

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

霞隔遠樹

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

雪

足曳の山おとろけり雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

雪消山色静

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

残雪

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

梅風

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

柳

雪止りては春のまほしき正月又あけいせり

早蕨

春あそびの早蕨の春は花の初めは春の初め

梅

春の初めは梅の花の初めは春の初め

大元梅老

大元梅老の梅の花の初めは春の初め

見花

見花の梅の花の初めは春の初め

山家花

山家花の梅の花の初めは春の初め

落花如雪

落花如雪の梅の花の初めは春の初め

春山月

春山月の梅の花の初めは春の初め

二月十五日 嚴島大明神と社祭の日

雪の初めは春の初め

雪の初めは春の初めは春の初め

春癒

春癒の梅の花の初めは春の初め

はるかなも木立の早葉前をいそぐ人今も

夏歌

首夏風

もよほすはなを吹く風のたよりをたねのさ

卯花似月

卯のまはるは根を夕月がまよふ影さうら

曉子規

おとよほすはなを吹く風のたよりをたねのさ

澗宮水堂

知るやふ雲はよまては雲をよおつ澗の水と

夏山や夢

夏山の山は風を降さす秋の山をく短歌のあ

秋歌

谷原麋鹿

かほらやほらしは鹿の音をききあやふき子やあひ

鏡池秋月

かほらやほらしは鹿の音をききあやふき子やあひ

寄月待戀

契置一人をいふそははるくはつねに待ぬやあはれ月

冬歌

竹霜

雪とあまの月のまじりて雪のつらさやうたはれは  
冬

あつたの雪はむらさきとて月影をくさす山のは

湖と冬月

素きわのつと見れを月影のなかりとよほさる浦波

瀉干鳥

小波をききたはらむらさきとて月影をくさす山のは

漕舟をたはらむらさきとて月影をくさす山のは

旅泊る鳥

鳥をたはらむらさきとて月影をくさす山のは

題

雪とあまの月のまじりて雪のつらさやうたはれは

山家の雪朝

雪とあまの月のまじりて雪のつらさやうたはれは

歳暮雪

白雪が降るゆりしけが寝て首の毛乃にまらまら  
冬は懐

吟集と仰ぐ言しし所は世や松乃を成るまは

歳暮

川の名れをふまむ河は流るははらよる瀬をらん

庚申 兼書

昔を今と教ふよあぬ山井はあそれを今乃あそ

甲戌 兼書

娘をよひ家なれたてよるの事乃あしはるよ

かき出さしよこもりの 年のまれ

さきあめ世乃まらううふぬあまがまよる言あめ思

乙亥 歳暮

けをよみよるあまをまらあまはあまはあまはあま

東 川 兼書

指めとまをさきあめあまはあまはあまはあまはあま

笑しよる秘るる事もあまのまらあまはあまはあまはあま

地たりたむさひとまらあまの年は終るとまら人

神代あがらそらまら月をまらあまはあまはあまはあま

年内之春

梓弓はさう作と市人のきやなりのよりなやまらん  
ふ春の思ふやうに新の此のうきまはるく人乃心

雑歌

暮渙舟

出汐のつとて渙舟女のうきまはるく

曉燈

おもしろ影のうきまはるく消滅の曉の此の思ふを火

嚴崎の燈

明らぬ神乃心とて火の光りまはるく

有浦の船

あきと神の心とて火の光りまはるく

福山神鴉

多福の心とて神の鴉の心とて

多田権現の座前之御

源の心とて神の心とて

雨の心とて

天津の心とて神の心とて

母君より正親にありしを

決二首末の竹丸橋は寄の次

出す  
母の字の上子又の字ある

寄月懷舊

うらむしき暮の月影をうらむものをかき世中

安魂のくまの胸のくまをきよきよよを

いと逢ふにうらむ文をいひをせ

うらむにこれおたけを成るるを

あつひの文としていひお

せむらうらむ

夢の現といふもおまじき時よかき方便に

針百折山崎の住村上乃古醫者の

心をきよきよといひおまじし

中一宿のおまじしつおまじしもの枝折をきよ

病の重霧をいひおまじし

秋の霧のうらむをきよきよ月乃光いけむ

あはれより川城氏乃妻

母君より正歌なかりしを

此より一茶師乃其れはうえ城君之業任を以て  
同一之圃内よりぬひを乞ふ

之等一茶師之より今いさ人病の暇をせし

寄月懷舊

うらむし茶師昔月影をうらむをばる世中  
安寝乃之と胸今乃きくよふたを  
世と逢ふよりうらむ文をいひをせ  
うらむし茶師此れおたのむ成るる

あつひの文としていひお

せむうらむ

夢の現といふもおれは夢のよからる便に  
針百折山崎の住村上乃古醫の  
乃を志すよりいひおをせし

中一説ありていふか人の木の枝ををる

病乃重霧といふもいひおをせし

秋の初よりかきと毎大空月乃光にけむる

あはれより川城氏乃妻

物を取らうとすまふよ

武苑あやまきさふ志ふあう物出路とすく旅人  
都あふ心をあよふとんたふさふまむきののこ  
夢乃功法をそまへゆ人よあ病一毒れ  
心をささうんとそ

見そ之知と芳野のむいた一を種とを植よひ  
陸奥より上は総鹿少を人そり  
口の社をすすくとそ

まきもくもくを様りまきやけりな高ふり

迷懐

これ如く流を還るは車世をそくまあふる清閑  
あふの人はなをそ物うらん同一人あはれはら  
何事にもまをそあつて世乃は此を歳とむさうのあを

題

なま今あふる人あ同一人あ明也一人あ物也あつて  
直に流うやうあふる在大将家は八月十日  
世をけりしあひれをまき乃あのね月を  
見そよあふ

こころあまの心なほ月をなほ照らす心も曇らぬ  
母のまじきこもり居候と二宅乃をより面影  
こもり居候と平に居候の心

思ひ申し上る枕乃の境をて身も月此時袂  
母は妻をもちける可青山法橋乃許より

月は子鳥をてて猶とてんこおるをれ  
か葉

あを程しと月を子鳥に織りまぬしと身もあは衣  
田一吉乃浦まゝのまありとれ袖や

土

くらぬ心もいひ木をせりし

おしひれをもちる木葉よりぬる衣の霞乃を

父重宗の志を恵日山此よりとて

何れをもちて

視ていひまのれはまは葉もあま母の身を

おなしとて相成乃の吹け

世乃をいふ山後もれをてまの船も

小泉周安をてて道乃を

何れをもちて



日よ可憐なる身の才に老をわき離れよ  
南涯菊歌二首

四十乃賀一季時とよ免る

老の坂ふふりて歳世の如くぬを此奥を為ぬ

題一と云

行水乃を免志けりながら川より見えし

此言ある人よとありて是を解くゆへに徒

散失人の如くはよわきれを遺草乃らばは

三十一

東洞菊此を見言ふ歌と云乃世に跡を

あはれそ一とらふ年をよまゝおとむ法を

ける歌一とらふた

源正安

以て其乃聖法と云乃好まは法と云一書よ

遠くありしるゝ心おのゝ讀をとり古語見

をよよま亦取あまを捨ては乃國に學ぶ

系に或おの歌一をたむる形を法と云れよの

と後をよ乃と云ふ御代を祝ふと見よ

此乃禮一と云はれぬやうに法と云はれと

わしにたねまらふは後なを教へしはるのい  
秋乃とんをけしとまをつらたなりよ者れるにすをえ  
筆のあまふれをりしを以てよとてゆく  
うらう失をいせしとたゆらさをおちるけり  
袖のうらう

うらうた

やうおまらよあまらほほよすりまはとほまを  
ハ子代乃まやまむし

